

千里山の有名人

匿名 希望者

言いわけから入ることになってしまったが、私は千里山会の会員ではなく、また将来もその気はないのでこの寄稿文は匿名とさせて頂いた。会員になる気がないのは私が地方都市で暮らすことと、しつこく二年に及んで入会への勧誘を迫った萩原君から見せてもらった会員名簿には、結構知った名前もあるが同級生（同学年ではなく）をはじめ本当に親しかった人たちはほとんど見られなかったからである。

それでは思い出か趣味の世界のことを書いてくれと萩原君が強迫したからだけでは、私自身、机の引き出しの中や棚に押し込まれ、しわくちゃで埃まみれになっている愛すべき千里山の思い出の数々を、引っ張り出して書いてみたいとの熱い思いが込み上げ、引き受けることにした。終わってみると、結構楽しい作業であった。萩原君及びこれを読んで下さる方々に感謝する。ちなみに彼は私より二つ三つ若いはずだ。

思い出の人々

靴修理のおじさん

当時の千里山を振り返り、私が真つ先に思い出すのは千里山駅の靴修理のおじさんである。駅と地下道の出入口の間に小屋を設け、大きな前かけをした無口で怖い顔のおじさんであった。私は幼稚園・小学校の帰り道よく寄り道をしたものだったが、その一つがこれのおじさんの仕事を眺めていることだった。いったいどれぐらいの時間眺めていたのだろうか？実際は二・三十分ぐらいだと思うのだが、その当時は一時間ぐらいのように感じていた。

当時の靴修理の多くは、革靴の底に穴が開いたり、底が減ったので新たに別の革を貼り付ける作業である。修理台に逆さにセットされた靴の底に、新たな革が適当な大きさに貼られ、釘で打ちつけられるのだが、その釘の扱いが正に神業であった。釘箱から適当な釘を十本ぐらい口に放り込み、その釘を口から直接金槌の打ち込み面に一本ずつ立てて、トントントンと連続技。この間、全く手を使うことは無かった。釘の打ち込み作業が終わると、今度は大きなヘラのようなカッター

で余分な革を切り取り、靴の大きさに揃え、切り口を靴と同じ色に塗り終了である。暇な時はよくこのカッターを砥石で研がれていた。優しい言葉をかけられた思いは一度もないが、同時にいつまでもじつと眺めている我々子どもたちを邪険に追っ払うこともなかった。

あのおじさんが双子の兄弟で、いつもその一方のおじさんだけを見ていたわけではなく、双方のおじさんに会っていたことを知ったのはずーっと後のことで、両おじさんが兄弟げんかをしているのを見てビックリ。

モノのなかった時代、下駄の歯すらすげ替えて使った時代。「治し 治し」と千里山中を回っていたおじさんもいたなく。穴のあいた鍋、釜、タライや骨の折れた・曲った傘まで、何でも治して使った時代。今では、パソコン等はもとより、洗濯機、冷蔵庫だって、治しに出すより新たに買った方が安かったり、販売店では治せなかったり。その結果、どんどんなものを捨てていく世の中。「もったいない」なんて日本の言葉を外人に教えられるなんとも嘆かわしい世の中になってしまったものである。

手に取まらないほど短くなった鉛筆に簡易な継足し金具で固定し、さらに最後まで使った時代が懐かしい。

人形劇のおじさん

下の噴水でやっていたのは、私が覚えている限り、最初は紙芝居であった。その内に登場したのが人形劇で、ベレー帽をかぶった優しいおじさんだった。

千里第二小学校で催された人形劇に、何人かの人形使いの一人として参加されていたことがある。でも普段はいつも一人で、複数の人形の扱いから彼らが喋る言葉まで全てを行っていた。大変だったと思う。しかも、生活の糧としての人形劇。つまり人形劇を見てくれる子供たちにお菓子を買ってもらって成り立つ商売。人形劇にしろ、紙芝居にしろ、売り上げとしては幕間？に売る水あめ等である。確か五円ぐらいだと思った。

我が家の場合、子どもが多いのでいつもお袋が松屋町筋のお菓子問屋まで出かけ、半月分かひと月分か忘れながらまとめ買いをして、日々の三時のおやつは現物支給。だから小遣いというものがない。いつも紙芝居はただ見だから、当然後ろの方でしか見れない。千里山はサラリーマンの街。私のような子どもの方が断然多かったはずである。坂は多いし、子どもの人口密度も低く、大阪市内の下町の商店街に比べると売上は少なかつたらうな と今さらながら思う。

切り絵 栗本 昇



千里山駅

ボン菓子の夫婦

私が幾つぐらいの頃かは定かではないが、昭和二十六年の頃か？ご飯は配給米だけでは当然足りない。麦混じりご飯（麦の方が断然多いので、白米混じりご飯と言った方が正確か？）、外米混じりご飯、時には黄変米混じりご飯。

さてその外米。多分、タイやマレーシアで採れた米だろう。細長く、やたらパサパサしていた。正直、美味くない。でもこのタイ米を美味しいお菓子に変えてくれる商売が当時、出現した。それを我々は「ボン」といった。夫婦で千里山を回って来るのである。何しろお菓子の材料、燃料、加工材料・・・何もかもない時代。何らかの方法で熱を加え、ある時点で突如「ポカーン」の音と共に外米がはじけ、今のポプコーンのように量が数十倍に成り、その分、軟らかくもなり蜜と絡めると何とも言えない味になる。

但し、当時は何から何までお願いする側が準備せねばならない。外米はもとより、燃料の薪、蜜を作る砂糖もこちらから持参せねばならない。先方はそれを作る機械をリヤカーに乗せて引つ張ってきて、後は労務のみの提供である。

商店街の人々

我々が日々接するのは、小学校の先生や同級生以外では、やはり商店街のおじさん・おばさんである。その中でも一番接触が多いのが、「佐井福」と「文化堂」であろう。ただ、片方は八百屋さんであり、もう一方はお菓子屋さん。我々、当時の子どもにとってはどちらの方が印象深いかは説明の必要もないだろう。佐井福さんとして、朝早くから店先で焚き火をし、威勢のいい八百屋さんではあったが。確かお米さんとか言う背の高いおばさんがいたなあ。

文化堂の女将さんは実に優しい人で、どうも次男を溺愛されていた印象がある。その本人が将来、吹田市議会委員を何期も勤められたというのだから驚きである。否、溺愛は女将さんだけではない。いつも噴水の清掃を心がけておられた親父さんと同じ。いつだったかの盆踊で仮装行列があり、その次男を桃太郎の扮装で参加させ、溺愛ぶりを披露されていた。

辻口さんのおばさん（魚屋）

当時の千里山では店先で魚を売る店は少なく、半分ぐらいが朝一番で一新太助よろしく天秤桶を担ぎ、御

用聞きに回り、注文を取って夕方さばいて届けるスタイルを取っていた。そんな中に噴水を左に曲がり、赤壁薬局と通り一つ隔てた所に辻口さんの魚屋さんがあり、おばさんがいつも御用聞きに回っていた。このおばさん、小柄ながら実に足が早く、小学校の父兄参加の競争ではいつも一番。いや、実に早かったな。

中川さん（本屋）

辻口さんの隣かさらにもう一軒（氷屋さん？）置いた隣が中川さんの本屋さんであった。よく立ち読みをして怒られたものである。中学時代になってニキビと共に、やたら裸の女性に興味が湧いてきた。当然のことながら親や女の子の友達には内緒である。恥ずかしいから男の友達でもよほど親しくないと打ち明けなかった。そんなある日、中川さんの本が平積みされた所にその種の本があり、夢中で見ているとおやじさんから「まだ早い」と再び怒られた。

上西さん（文房具屋）

文化堂の隣に上西さんの文房具屋さんがあった。文房具屋さんには他にも二〜三軒あったが、ここは便利な

場所ではあった。でもいつも薄暗く、陰気な感じでもしも怖いお婆さんが店番をしていた。一度、埃まみれの商品に文句を言ったら、「だったら買うな」と。当時、お客様は神様だ。なんて言葉はなかったな。

清水さん（お風呂屋）

この上西さんの隣だったと思うが、お風呂屋さんがあった。ただ我家には五右衛門風呂があったのであまり使った記憶はない。友達が連れ立ってお風呂屋さんに行くのが、羨ましくて羨ましくて仕方がなかった。その内に、相撲やプロレスのTV実況中継が全盛期となるが、まだまだよほどの金持ちでないと自宅にTVがある時代ではなかった。お風呂屋さんはどうだったのかな？

その他でTVが見れるのは関大の食堂か、このお風呂屋さんのもう少し先に出来た電気屋さんであった。もう少し時代が過ぎると下の噴水に設置されたが、その時はお勤め帰りの大人が黒だかりになって見入っていた。

栃錦対若の花の大相撲、力道山・木村対シャープ兄弟のタッグ戦が何とんでもものすごい人気だった。

これらがTV人気を煽ったのか、TVがこれらの戦いを煽ったのか。まさに相乗効果だった。

山崎さん（雑貨屋）

駅の交番の向かい側で、角にあった小さなお店であった。ベッタン・ラムネ（ビー玉のことで飲むものではない）・凧・独楽・リリアン・ミカン水・飲みものラムネ・のし烏賊・・・子供が喜び、遊ぶものなら何でもあった。今思うとなかなか美人のおばちゃんだった。確か、ご主人はお巡りさんと聞いた。

昭和二十七〜八年頃から子どもたちの中で釣りが流行り出した。この山崎さんの店には、五円のごんぼ竿から釣り針・釣り糸・浮・錘それにイトミミズまで売っていた。イトミミズは確か五円で、濡れた新聞紙に包れて売っていた。自宅の北側で、陽があまりささないじめじめした場所の石の下には、大きなミミズがいたが、気持ちが悪いのと我々は鯉や鮒釣りというよりボテン釣りだったので、このイトミミズで十分だった。主な釣り池は永楽園の奥だったように思うが、千里山も周辺には山があり、畑や水田があった。だから溜池が必要でそれらの池が格好の釣り池であった。

釣りそのものは別に禁じられていたわけではないと思うが、子どもたちは時に行き帰りの畑や田んぼで農作物を盗んだり、いたずらをする。それでなくとも食べるものに飢えていた時代である。

さらに最悪はその日がぼうず（一匹も釣れないこと）だったりすると、腹いせに池の樋栓を抜く奴が出る。これでは溜池が干し上がってしまう。その意味で、溜池で釣りをすることは許可されていなかった。当時は、「子供の身の危険を考えて許可しない」なんて考えは全くなかったし、自分の身は自分で守るという意識は徹底していたはずだ。「池の周りに柵が設置されていなかったためにうちの子が溺れ死んだ」などと訴える親はいなかっただろう。死ぬ子もいなかったと思う。

山崎さんの店に限らないが、当時の駄菓子屋で売っていた食べ物の衛生状況はどんなだったろうか？

でもそんなことを気にする奴なんて女の子にだっていなかったと思うが。かき氷だって、新聞紙の上に乗せて売っていた。新聞紙が食べ物の包装紙であった。イトミミズの包装紙でもあったが。

その何が問題なの？といった感じか？

便所は汲み取り式が長く続き、それも昭和三十年の

後半頃ですら牛に曳かれた荷車に肥桶を積んで農家の人が取りに来た。さらにそれらの荷車を押す牛の糞が路面に転がり、オシッコだって垂れ流しだった。

林良二さん・伏見政治さん

私が知る限りにおいて、吹田市会議員選挙でいつも千里山を代表して立候補、当選されていたのはこのお二人だったと思う。当方は、その頃まだ選挙権もなくただただ連呼されている名前を覚えていたのだが、確か林良二さんには、私よりかなり上のお兄さんと、一つ上のお嬢さんが居られ、お兄さんの方はいつだったか忘れたが、受験勉強中に「泥棒！」といった声に二階から飛び降り、警官に抵抗した強盗を取り押さえ表彰を受けられたはずだ。また、私より一歳上のお嬢さんはかなりの美人だった。

忘れもしない昭和38年の吹田市会議員選挙の時、私は既に東京の大学に進んでいたが住民票を移していなかったので選挙権は残っていた。その時、千里第二小学校元校長の有川清夫さんが立候補されたのである。確か有川校長は奄美大島のご出身で、昭和27年秋に着任された。今で言う熱血校長で生徒・その父兄にす

こぶる評判が良かった。その頃お世話に成った生徒達は選挙権を得ており、さらに応援に大勢集まったと聞く。その後の生徒の父兄票も大きい。その結果、千里山住人のほとんどの票を一人で集めてしまわれ、林さんも伏見さんも共に討死されてしまったことを覚えている。

その他の思いで

花壇町の遊園地&関西大学

この遊園地が閉鎖されたのは昭和二五年だったと思う。その前年、子供たちだけで遊びに行き、ここで飼われていた猿に手を噛まれたのを覚えている。その意味では動物園もあったのだろう。最も、戦前ならいざ知らず、当時だと飼われていたのは、牛、馬、羊、山羊、豚、猿といった、当時どこでも見られた家畜が檻に入れられていたのだと思うが。

一番高い所に飛行塔があり、くるくる回りながら次第に高く引き上げられていったと思うし、一回ぐらいは乗ったはずだがよく覚えていない。覚えているのは閉園にならずとあとまで上半分が撤去された飛行

塔の下方半分が残っていたことである。

いつ頃に関西大学がこの地を買取り、高校や大学の用地として使用し始めたか知らないが、かなり遅くまでこの地に自由に入れた。そのために昭和三十年頃か？二人の小学校低学年児が遊園地時代のポット池で溺れ死んだ。そのときの水深は十〜二十センチぐらいだったそうだが、千二小の生徒のほずである。

その他、ここにはとてつもなく長い滑り台があり、土地の起伏をそのまま利用したもので、石かコンクリートで出来ていた。だから下手に滑るとズボンに穴が開いてしまう。それでなくても我々は兄貴のお古でつぎはぎだらけ。穴でも開けようものならお袋からこつぴどく叱られるので、どこからブリキ板や段ボール紙を拾ってきてお尻の下に引いて滑ったものである。

昭和二十年代前半か？多分、今の関大一高のグラウンドの場所で「大相撲」が開かれたことがある。一日だけで横綱以下全員参加だったと思うが確かではない。小さな小屋だけに本当に身近に力士を見て、「デッカイナ〜」と感心したのは覚えているが、当時の力士名は覚えていない。

関大そのものにも時折、遊びに行った。大学祭は、ある時期必ず見に行ったものだ。特に最後に行われる「土人踊」は圧巻だった。今思うと一体何人の学生が土人に扮していたのだろう？ 裸の体に墨を塗り、藁の腰巻だけで、グラウンド中央の焚き火を囲って踊る。

「・・・ラバさん 曾長の娘 色は黒いが南洋じゃあ美人」と歌いながら。最後はお風呂屋さんへとそのまの格好で流れ込んで行った。一軒や二軒のお風呂屋さんではとても足りないの、阪急電車（これもきつと貸し切りだったのだらう。でないと、他の客も墨だらけになってしまう）にも乗り込み、吹田あたりへ繰り出して行った。前もって自分の行く場所は割り振られていて、着替えも持ち込まれていたのだらう。でないと帰りに着るものがない。大学祭は秋深かったと思うのでそれなりに寒かったはずである。

大学祭だけに教室では色々の催しものがあり、私にとって一番最初に広島・長崎の原爆の恐ろしさを目にしたのは、この時展示されていた写真集等であった。

大学祭以外でも馬術部の練習や、グライダー部の練習を見に行ったことがある。当時のグライダーは大勢の部員がゴムロープを引っ張って、その張力で飛ばし

く覚えていた。

当時の映画のスクリーンはシートに毛が生えたようなもの。風邪が強いと揺れに揺れ、片岡千恵蔵扮する多田羅盤内の顔が歪んで見えた。また、何しろ娯楽の少ない時代だったので、結構、大人も見ていた。となると我々子どもはまたもや後ろに追いやられてよく見えない。ただスクリーンが先ほど言ったように薄っぺらなシートのようなもの。後ろからよく見えた。絵としては左右が逆となるが。

そんなある夜、バイリースオレンジの宣伝で、「風と共に去りぬ」の予告編が上映された。まず、美しいカラーと、炎上する街を馬車で突っ切るシーンに感動した。ビビアンリーの美しさにも。さすがそのときのスクリーンはシートではなく、ハードなものであった。ミカン水とラムネ、せいぜい三ツ矢サイダーぐらいしか知らなかった我々には、バイリースオレンジの出現及びその宣伝のセンスに驚いたものだ。確かチンパンジーを使ったCMだった。

バイリースオレンジとバナナは、特別な日のみ飲ませて、食べさせてもらえるもの と思っていた。そう言えばハリス・チューインガムもそうだった。

ていた。だから精々十数メートルも飛ばせば御の字である。まるでパチンコ玉のようであった。

駅前広場

ずい分以前に駅前の広場は市場に変わってしまったのだが、我々が小さい頃は広場だった。最初はプラコンコやシーソーすらなかったただの広場であった。そのうち申し訳程度にそれらの施設が設けられたが、今と違って管理も適当。壊れたら壊れっぱなし。もつともあの当時、そのような遊戯で遊ぶ子なんてよほど小さいか女の子ぐらいだったらう。自然を含め、遊びなんていくらでも考え付いたし、場所もあった。だいたいの車なんて牛・馬・人が引く荷車ぐらいしかなく、道路はいつも子供遊び場。宝踏みであれSケンであれ、缶ケリ、探偵ごっこに死刑やラムネも道路一杯を使って遊んだものだ。

駅前広場とて同じで、まあ印象に残っているのは盆踊りと映画会ぐらいか？

盆踊りは下の噴水と駅前広場ではどちらが先だったか記憶が定かでない。どちらもまだまだどぶや雑草の管理がずさんな頃だったので、蚊に悩まされたのはよ

とても普通の日に口にできるものではない と悟っていた。そのうちにコリス・チューインガムなんてまがいものが出てきたり、ロツテも生まれた。しかし当時はとてもハリスの敵ではなかった。

ハリスの社長、森さんという方が千里山にお住まいだったとは当時も知っていたが、お宅がどこで我々ぐらゐの年齢の子供さんの有無も知らない。

ある日曜日、小学校に「ハリス坊や」がやってきた。ラジオでは当時、相当人気のある声帯模写番組であった。毎週、どこかの小学校で公開録音されたものだったと思う。

チューインガムといえば、我々はよく麦を捏ねてチューインガムを作った。捏ねる台はかまぼこの板である。よくもまああんなものでだまされていたものだ。口の肥えた今の子どもは当然として、萩原君の年代でも絶対に口にしなかっただらう。（追…口にしました）

郊外学園

戦前の郊外学園は知らない。私が知る限りにおいてはず藤棚があり、その奥に深い方のプールがあった。そして浅いプールとテニスコートが続き、グラウンドが

あつた。その先に集英小学校の寮があり、時折、市内から生徒が泊まりに来ていたようだ。そちらの方のことはよく知らないが、プール等の方は昭和二十年代の終わり頃だろうか？ 当時の富士銀行独身寮用地に売られてしまった。我々が小学校時代、学校にはプールがなく、二十六・七年頃にPTA管理か何かで使わせてもらったはずだが、その前後は全くプールとしては未使用。水のないプールで勝手に我々はワンバンポールや三角ベースポールで使った。

服部緑地

ここにプールができたのはかなり後である。(現天皇ご成婚の後)で、私は東京の大学に進んでいた。

服部緑地公園や墓地公園に人気が出始めたのは、昭和二十年代終わりに近い頃だと思う。白川郷の茅葺合掌造りの民家が数棟持ち込まれ、ボート池が設置され、千里山から歩きや自転車で遊びに行ったものだ。

当時の我々は、結構健脚で小学校低学年生の時も箕面や牛ヶ首池まで歩いてお兄ちゃんたちについて行った。高学年になると、蛭が池の伊丹飛行場まで友人数人と自転車で行った。

当時の伊丹飛行場は米軍の管轄下で、銃を持った米軍兵士がところどころに立っていた。お巡りさんのピストルしか見たことがなく、銃となると映画の世界であつた我々にはおっかないものであつた。

蛭が池のある一画はまるで映画の西部劇の世界のようであつた。真昼間から酒を飲んだ兵隊が酔つ払つて路上をふらつき、その兵隊にびったり寄り添つた日本人の女。嬌声が響き渡り、飲み屋の出入り口は西部劇でおなじみの扉。いつ、シエーンが飛び出してきてもおかしくないようなシーンであつた。

それにしてもあの服部緑地公園はその後、天皇・皇后ご成婚記念公園となり、さらに一段と奇麗になつたのは知っているが、三年ほど前に用があり訪れ、御堂筋線の服部緑地公園駅の前及びそこから公園への道の姿にビックリした。乗馬練習場や一段と整備された公園。もつともご成婚から半世紀以上経つんだものね。

思い出というものは面白いものだ。書いているうちに次々と増幅されていく。かなり一人よがりを楽しんで書いてしまった。読まされる方の苦勞も知らず。読んでいただき、ありがとうございます。